

合い二三日は木切りをしたものでした。この棚は翌年の春先まで乾燥させておきます。

サルトツ引き

この地方では、三月頃になりますと、雪の表面が堅くなると、雪の上を歩いて渡れるようになります。約一年、棚に積んで乾燥させた木を四尺ほどに切つて山のソドウやフジやマンサクという木のツルでしばり、人が引いてきます。これをサルトツ引きといひ、ソリの使える場所まで引つ張りだしてきて、さらに棚に積んで乾燥します。

ソリ運搬

棚に積んだ薪は、暮れの雪が降り始める頃までの約九ヶ月間、放つて乾かします。暮れになると雪が降りますので、薪をソリに乗せ、家まで引いてきます。雪がなくて、正月になる年もありました。乾燥して軽くなつた燃えやすい木を、雪が降つてから、ソリで引いてくるのは、力がいらなくて合理的といえます。

引いてきた木は家の軒下に入れます。私が世話になつている家では、東側の、厩の後側に積みます。こつして囲炉裏や竈のそばまで運び込み、すぐ焚ける状態になります。薪には二年先の準備が必要でした。

囲炉裏と竈

薪を燃やす主な場所は、囲炉裏と竈でした。軒下に積んだ薪は、一部が囲炉裏や竈の近くに据えられ、いよいよ燃料としての出番となります。

薪や柴から生じる火の役割ですが、まず人と馬の食べ物を料理する燃料としてののはたらきが第一にあげられます。この地方では、囲炉裏のことを「ユレイ」といいます。板床の囲炉裏に自在鉤を吊し、そこに鍋をぶら下げて料理します。味噌汁や煮物以外に、ご飯も鍋で炊けます。

私がこの村を最初に訪ねたのは昭和四二年ですが、その頃の南会津の農家は、ほとんどが囲炉裏の火を使つて、鍋で料理をしていました。薪をたくさんくべて、水をはつた鍋をかける女たちの姿を鮮明に記憶しています。鍋には五升だき、四升だき、三升だき、ぬか鍋などがありました。鍋を下げていない時は、鉄瓶を下げ、何時でも使えるようにお湯を沸かしておきます。

竈は馬の飼育との関連で考えなくてはなりません。この地方は馬産地であり、雌馬を飼つて子をとり生活をしていました。その馬の飼育に竈が必要だったので、当時、既に馬は少なくはなつていましたが、人とともに生きていました。馬を飼う家には、必ず竈が土間にありました。竈は、カベ(壁土)といつ粘土で作ります。この



火の周りでは座つて仕事する(後ろに見える「ながし」は近代化の証) 1969年7月撮影

竈に、羽釜をはめ込んで乗せます。羽釜は、鍋の周囲についており、丸い形の底なので、熱効率の良い釜です。

鍋と釜の呼称

この村には羽釜のことを、鉄鍋とか釜鍋とよぶ人がいます。竈に据えるものとして、古い時代には鍋を使用して、羽釜の方が新しいのではないかと思うのです。明治、大正時代には、鍋を竈に据える家がありました。

羽釜を床に据える時、丸い底を安定させるために、トウナツの形の鍋敷きを使います。釜の下



百姓は空荷では帰らぬ(野良仕事の帰りに柴を運ぶ)
1969年7月撮影



冬の準備。冬に備えて新割りをする
1969年11月撮影

に敷きますのに、釜敷きとはいわないことと合わせて考えますと、興味を引く問題です。

改良ガマ

大正ガマについて、鉄でできていてる竈が普及したことがあります。大正ガマというのは、ハガマ(羽釜)の下に火を炊く場所があり、少し背が高く、脇に煙突がありました。これを使うと、木が節約できました。炊きものを節約しながらご飯が炊ける力マでした。

婦人会で買った大正ガマがあり、村で祝言などの時、赤飯をふがしたりしますのに、借りられるように備えておりました。

昭和三年頃、ムシガマという竈が使われました。鍋でご飯を炊く時は、焦げないように、朝起きてから囲炉裏のところに置いていなければなりません。それでは大変だからということで、ム

シガマを買ったのです。消し炭を三ヒカキぐらい入れ、さらに杉の葉を入れて、火をつけたら再び寝られました。起きる頃になりますと、ご飯が炊けていましたので、朝の仕事が楽になりました。この竈は煙が出ませんでした。十人ほどの家族だつた頃は、ムシガマには羽釜の五升だきを使い、毎朝、三升ぐらいのご飯を炊いていました。

馬が少なくなってきたこと、改良した竈が出て、古くからの竈で、火を焚くのが面倒となつて、竈を壊す家が現れます。囲炉裏の方がよいとなつて、鍋の使用が多くなつてきました。馬の竈はほとんどの家が売つてしまいましたが、若い時に使つた思いもあり、竈の一部を、今も倉に残す家もあります。

大内という村は標高が六百五十メートルもありますので、真夏以外は火の暖かさを必要とします。冬は零下十度にはなりません。囲炉裏の縁をマッコノチというのですが、その上に置かれた濡れ雑巾を見て驚いたことがあります。火の側は火の熱で湯気が立ち上つているのに、反対側は凍つたままなのです。冷蔵庫も卵を凍らせないための冷蔵庫として使っているほど寒い日があります。こつした時の火は、二年がかりで用意された薪の貴重さを、体の芯まで思い知らせます。その暖かさは、火の神の力を感じさせ、薪とつ有り難い恵みをもたらす山の神に、思わず感謝したくなるほどです。人が人らしく生きる幸せを噛みしめる一瞬が、火の力にはあります。

熊とともに生きられぬものか

確かに薪の時代ではありません。しかし、我々は薪とともに大切なものが見えなくなつています。山は人間だけのものではなくなつたはずですが、山の周囲には多くの生き物が、山の神の恵みを受けて生きていました。樺も熊も鳥も魚も虫も、そして人も山の恵みで命をつないで来たはずですが、薪を取っていた山は、現在、国有林として針葉樹が植えられています。杉や檜木は熊の食料にはなりません。我々人間が熊の生息領域を侵しているのです。腹が減つて、人里に降りた熊は、害獣として射殺されます。その胃の中は空っぽと聞きます。そんな権利が人にあるのでしょうか。

国有林の利用を変えないと、山は死ぬと思えます。薪の取れた山は、熊の生息領域ですから、江戸時代の入会地の考えを復活すべきです。熊も人も樹木もともに生きられるような山の利用。これが、人が人らしく生きていく証ではないのでしょうか。

◎ 相沢 韶男(あいざわ とうお)

武蔵野美術大学教授。一九四三年茨城県生まれ。武蔵野美術大学卒業。一九七七年より現職。専門は、民俗学、文化人類学、生活学、物質文化。著書は、『大内のくらし』(ゆいであ)、『民衆の生活と文化』(共著、未入社)など。